保護者・地域の皆様　　平成１９年８月３０日

学力向上だより　No、４

戸田第一小学校　学力向上拠点形成事業通信

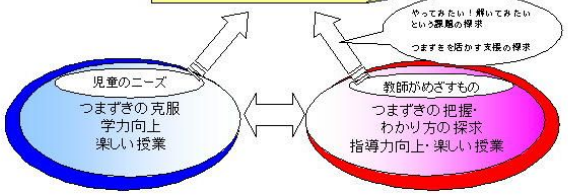
まだまだ残暑厳しい日々、保護者の皆様におかれましてはいかがお過ごしでしょうか。夏休みという長期の休みにあたり、子どもたちとの貴重な時間を楽しんでいたこととお察し致します。

さて、学力向上の研究も３年目を迎え、本校は昨年までの研究を継続し、さらに深めることで児童の学力向上を目指しています。特に算数パートでは、様々な学習活動の中から、児童がつまずきそうな点や、それに対応するための指導や支援の仕方に着目して研究を進めてまいりました。今年度の研究の内容・経過をお知らせ致します。

Ⅰ　算数パートの研究構想

「学ぶ楽しさ　ふれ合う喜び」を味わう授業づくり

日々の授業の充実



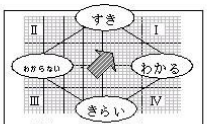
研究テーマ「学ぶ楽しさ　ふれ合う喜びを味わう授業づくり」を達成するため、また、児童のニーズ・教師がめざすものを達成するために本校では日々の授業がより充実するような研究を進めています。

算数にはそれまでの学習を使って新しいことを考える場面が多くあります。低中学年で「たす」「ひく」「かける」「わる」の四則演算を学習し、高学年ではそれらを使い小数や分数などの様々な問題を解いていけるようになっていきます。そこで、当たり前のことではありますが、戸田第一小学校では日々の授業のさらなる充実を目指し、よりよい教材の開発・探求・実践を繰り返しています。そして、児童により分かり、より楽しい学習を提供できるように努めています。

Ⅱ　算数パートの研究内容
～児童のつまずきやわかり方の研究～

①児童の実態を知るために

年度の初めに本校独自の復習テストと算数アンケートを実施し、それを元に実態把握グラフの作成（裏面、4月）をし、児童の傾向をつかみます。さらに１学期中に行われる学力調査テストの結果をプラスして児童の算数に対する傾向をより具体的に知り、日々の指導に活かすようにしています。



児童の実態把握グラフ
（すき・わかるを２次元グラフにまとめています。）
子どもたちの算数が「すき」で「わかる」ようになるよう、研究を進めています。

また、毎年３学期に行われる「３つの達成目標」の調査結果から、その年度において十分に力が定着しているかを確認するようにし、十分なところはさらに伸ばし、不十分な点は早期に補うように努めています。

②つまずきへの対応

本校では一昨年度より継続して児童のつまずきのポイントを記録した『つまずきシート』（右側）を作成しています。学年、単元、つまずきと間違い方、指導の手立てなどを明確にし、その情報を職員全体で共有化していくことで指導の充実を図っています。つまずきを意識した授業を通し、児童一人一人の実態を把握し、学力向上につなげています。

つまずきシート例

また、事柄に対して数を使って考えるだけでなく、目的に応じて手や体を使って具体的に操作する活動を意識的・継続的に取り入れています。五感を使うことで知識と経験をより密につなげ、今後の生活の中で生きた力として働くようにさせたいと考えています。整数や小数、分数の導入の場面ではその大きさがどのような大きさに当たるのかという量感を養ったりすることにもつながります。

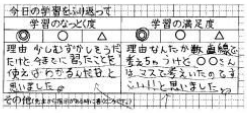
③個に応じた指導（T.Tなど）

本校の算数科は、５・６年生が教科担任制を行っており、算数担当教諭２名が全４クラスの全時間に入って指導（単元により複数で指導、課題別・習熟度によるコース別指導など）をしています。また、１～４年生においても担任とわくわくティーチャーが連携を図り、少人数指導に取り組んでいます。

ティームティーチング

④児童の評価・授業の記録

本校では、算数の授業で自己評価を継続的に行っています。高学年では授業終了時に授業の納得度と満足度を各３段階で評価し、また、気づいたことや疑問なども自分なりの言葉でまとめさせています。このように、客観的に自分の学習をふり返る活動は、進んで授業に取り組む意味においても大切です。授業の納得度や満足度に関しては、それぞれの児童が授業のどこを評価するかによって全く変わってしまいますが、継続的な評価をもとに、教師側からもその評価を一人一人を見取る指針として活用し、次の授業や指導・支援に生かしています。また、そのことにより、一人一人を大切にした学習活動が展開できると考えています。



また、日々の１時間１時間の学習の記録として、教師がノート・授業プリントの点検をすることはもとより、補助簿を合わせて使いながらその授業のねらいが達成されているかなどを細かく把握できるように努めています。そしてまた、それを次時の授業に活かすようにも心掛けています。さらに、毎日の授業内容の記録するという意味で黒板に書かれていることをデジカメで撮影して残すなど、細かく記録を残す工夫をしています。

⑤その他

学習態度の育成という観点から、授業中の態度、発言の仕方はもちろんのこと、算数の学習に欠かせない「習ったことを生かして考える」ということを指導の中に入れています。また、右の『だいはかせ』を活かしながら、よりよく、より楽しい算数を作り上げていけるように努めています。

『だいはかせ』

○だれでも
○いつでも
○はやく
○かんたんに
○せいかくに

⑥きらりタイムの活用

本校では夏休みの短縮などで生まれた時間を活用し、年間15時間程度の『きらりタイム』を設定しています。これは基礎的な力を育成するための取組で、主に国語と算数で活用しています。複数の指導者が各クラス（又は学年）に入ることのできるように設定してあり、きめ細かい指導が可能となっています。算数科としての活用の仕方としては

①テストの結果などから前学年までの学習内容で不足しているところを補充する。
②これから学習する単元につながる前学年の学習事項を確認する。
③単元の中にきらりタイムを入れ、児童の理解が低いところを補充したり、発展的な問題を扱ったりする。
④単元終了後に発展的な学習内容や児童個々の課題に応じた活動を取り入れる。
⑤単元を終えての確認テストで内容の理解が不足していると思われているときの補充的指導をする。

の５つを柱にし、指導を行っています。

また、時間割上なるべく同じ時間を学年で確保するようし、学年担任全員で全体を指導できる体制をとることで、児童の習熟度や個々の課題に沿った形で授業を展開しています。

Ⅲ　実践例①～３年生「わり算」～

この授業では３年生で初めて学習するわり算の学習をしました。

「いちごがりに行きました。いちごを12ことってきました。1人に4こずつわけると何人に分けられますか。」

（左ビブロック、右ビノート）
ブロックで行った操作をノートにまとめています。

という問題を解きながらわり算の意味やイメージを高めていきます。実際にイチゴの模型を分けていくことで目で見てわり算という計算を理解していきます。

①１２－４－４－４＝０　だから３人
②４＋４＋４＝１２　だから３人
③４の段で答えが１２になるものをさがす。
　だから４×□＝１２
④同じ数ずつ分けているから１２÷４＝３

（提示用の模型）

さまざまな意見から最終的に１２÷４＝３の式の良さを見つけ、まとめとしてわり算の学習をしました。また、かけ算がくりかえしのたし算を簡単にしたものであるように、くりかえしのひき算も簡単にしたものがわり算であるというイメージを持っている児童もいました。

（絵本にまとめる作業）

授業の最後には前回の学習（前回は１２個を４人に分けると何個ずつ分けられるかを学習しました。）との違いをはっきりさせ、今後の学習のためにこのわり算が「いくつずつ」とっていくわり算であるということを押さえられるように絵本にして確認・記録しておきました。これをもとにすることであまりのわり算が出てきたときにも、「まだとれる。」「もうとれないからあまり。」などのイメージが定着し、より理解が深まります。

以上のように児童の実態を詳しく把握しながら、日々の授業が楽しく、わかる授業を進めて参りたいと思います。